



本殿横に建てられた「仮本殿」
 ※本殿と拝殿は既に足場が組まれ、約一年をかけての改修工事に入っています。
 来年十二月迄は仮本殿へご参拝ください。



仮殿遷座祭齋行

本拝殿修復を前に
 仮のお住まいに

「平成ノ大造営」の第一次事業、辺津宮本殿及び拝殿の修復を前に、八月二十九日に仮本殿の洗清併清祓と新殿祭、翌三十日夕刻には御祭神に仮本殿へ御遷り戴く仮殿遷座祭がそれぞれ滞りなく斎行された。

仮本殿の建設にあたっては、七月五日の地鎮祭の後早速基礎工事が始められ、事前に刻まれた材によって速やかに拝殿が組み上げられた。八月に入ると石垣が積まれ、益明けには周囲の杜の植栽、八月二十五日には仮本殿が完成し、遷座の準備が万端整った。

洗清併清祓

雨が断続的に降り続く、八月二十九日午前十一時、仮殿遷座に先立ち殿内の



仮本殿内

平成ノ大造営
 時満ちて
 道ひらく

余滴

去る八月三十日、午後八時、神様に仮本殿にお遷り戴く仮殿遷座祭が執り行われた。昭和四十六年の「昭和の大造営」から既に四十年以上が経過し、各所に傷みが見られるようになり、「平成の大造営」の第一次計画、辺津宮本殿及び拝殿の修理修復がはじまった▼造営に伴い本殿隣に設けられた仮本殿は、沖津宮の磐座祭、高宮の神籬祭祀を意識して造られた。岩や木々を依代とする祭祀は、神道の古い形の祭りとして、古代祭祀といわれる。その後、神社にも社殿が設けられることとなるが、それは仏教の影響によるものとされている▼全国には約八万の神社があるが、古代祭祀といわれる祭場を今も維持存続しているところは殆どない。そのため宗像大社は貴重な祭場を残す全国でも珍しい神社である上に、そこで祭りが存続していることは極めて稀有なことであり大きな特徴でもある▼岩や木々に神々が宿るといふ信仰は自然崇拜とされ、その地域で育まれてきた民族宗教に多くみられる。ただ、その後、一神教が広まることにより、生きとし生けるものには神々が宿るといふ多神教は世界中で減少してゆく▼全ての宗教はすべからず、その時代々の影響を受けて変化するが、宗像大社の古代祭祀は、今も古からの神々への畏怖畏敬の念を感じさせてくれる。近年、価値観の転換が国際的に叫ばれているが、古代祭祀は人類がこれらから進むべき道にいろんない示唆を与えてくれるのではなからうか。(敬)

「平成ノ大造営」の第一次事業、辺津宮本殿及び拝殿の修復を前に、八月二十九日に仮本殿の洗清併清祓と新殿祭、翌三十日夕刻には御祭神に仮本殿へ御遷り戴く仮殿遷座祭がそれぞれ滞りなく斎行された。

装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る
 フリーダイヤル 0120-075-980
 福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401
 フリーダイヤル 0120-055-092
 授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23
 フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技
 総合建築業 株式会社 弘江組
 〒811-3406 福岡県宗像市稲元4丁目20 電話(0940)32-2567



洗清と御祓を行う「仮殿洗清併清祓」を齋行。葺津権宮司が齋主を務め、「洗清の儀」「奉検」の後、仮本殿・雨儀廊・筵道がそれぞれ祓い清められた。

新殿祭

同日午後二時、建物を司る神々である屋船久能遅神・屋船豊宇気姫神二柱の大神を祀る「仮殿新殿祭」を齋行。高向宮司が仮本殿の四隅に御富伎玉(建物)の竣工を称え祝うと共に四方の方位除を祈念する玉を懸け、次に建物の四方への散供、建築儀礼である鳴弦の儀を行い、その後、宮司が古例に



新殿祭

做い巽(南東)の方角に向いて祝詞を奏上、建設施工関係者等が玉申を捧げた。

二十九日、宮司以下全神職が齋館に参籠、身を清め翌日の仮殿遷座祭に備えた。

仮殿遷座祭

翌三十日午後七時半、高向宮司以下奉仕員、齋館前に列立。祓舎で祓を受け、本殿へ参進、仮殿遷座祭を齋行。宮司が本殿の御扉を開き祝詞を奏上、境内は消灯され、小雨交じりの浄闇のなか、午後八時絹垣に囲まれた「御」が本殿を出御。氏子青年会が提灯を掲げ随伴、奏楽の音と警蹕の音が響く



鳴弦の儀



四方祓い



高主奉検 (洗清併清祓)



洗清の儀 (洗清併清祓)

か、遷御の列が筵道を進み仮本殿へ入御。再び神前で宮司が祝詞を奏上、宮司・参列者代表の平成ノ復興期成会・出光豊副会長、氏子会・置帖会長が玉申を奉り恙無く遷御を終えた。

仮本殿は掲載の写真の通りで、本殿に隣接して建てられ、自然石を野面積みした石垣の上に、木造校倉造りの拝殿が設けられている。

また、神前正面には大神の神威を象徴して真榊が植えられ、沖津宮の鎮まる沖ノ島や辺津宮境内の高宮祭場で執り行われた古代祭祀を

辺津宮仮殿遷座諸神事 式次第

仮殿洗清併清祓 八月二十九日 午前十一時

当日早旦社殿を装飾し諸具を弁備す

時刻、齋主以下参列員参進(是より先手水の儀あり)

次に、齋主以下参列員仮殿所定の座に著く

次に、所役神殿の御屋根を開く

次に、修祓

次に、祭員神殿洗清の儀

(奉仕終わりにて、洗淨用具を撤し復座)

次に、齋主奉検

次に、所役神殿の御屋根を閉づ

次に、新殿内、雨儀廊、筵道を祓ふ

次に、各退出

仮殿新殿祭 八月二十九日 午後二時

当日早旦社殿を装飾す

時刻、宮司・祭員以下参列員参進

(是より先手水の儀あり)

次に、宮司・祭員以下参列員仮殿所定の座に著く

次に、一同一礼

次に、修祓

次に、神饌を供す(瓶子、水器の蓋のみ)

次に、新殿(神殿)の四隅に御富伎玉を懸く

次に、新殿の四隅(仮拝殿を含める)に

米・酒・切木綿を撒く

次に、鳴弦を行ふ

彷彿とさせている。

尚、重要文化財に指定されている辺津宮の本殿と拝殿は、一年三ヶ月をかけた改修に入り、来年十二月には本殿遷座祭が行われる。

「平成ノ大造営」は昨年二月に第二期復興期成会(出光昭介会長)が発足。平成三十三年まで三カ年を一期とし、第三次まで九年をかけて、当大社を構成する沖津宮(沖ノ島)、中津宮(大島)、総社である辺津宮の三宮各社殿や施設の改修・新設を行う予定である。



仮殿遷座祭



祝詞奏上



仮本殿へ入御



筵道を進む、遷御の列

次に、宮司 巽に向ひて祝詞を奏す(此の間諸員警折)
 次に、宮司玉串を奉りて拝礼(祭員列拝)
 次に、参列者代表(弘江組社長・内山緑地建設代表) 玉串を奉りて拝礼(他参列者列拝)
 次に、神饌を撤す(瓶子、水器の蓋のみ)
 次に、一同一礼
 次に、各退出

仮殿遷座祭

八月三十日 午後七時半

当日早旦社殿を裝飾す
 時刻、宮司以下祭員参進(是より先手水の儀あり)
 次に、宮司以下祭員祓舎に著く
 次に、修祓

これより本殿

次に、宮司以下祭員拝殿所定の座に著く
 次に、宮司一拝(諸員之に倣ふ)
 次に、宮司本殿の御扉を開き畢りて側に候す
 (此の間警蹕、諸員平伏)
 次に、宮司祝詞を奏す
 次に、宮司殿内に参入し諸員各其の位置に列立す
 次に、遷御(此の間警蹕)午後八時

これより仮殿

次に、入御(此の間警蹕)
 次に、宮司祝詞を奏す(此の間諸員警折)
 次に、宮司玉串を奉りて拝礼(祭員列拝)
 次に、参列者代表玉串を奉りて拝礼(他参列者列拝)
 次に、宮司一拝(諸員之に倣ふ)
 次に、各退出

沖津宮御神璽迎え

十月一日のみあれ祭に先立ち、去る九月十日玄海灘の孤島に鎮座される沖津宮の御神璽をお迎えする沖津宮神迎え神事が厳肅に齋行された。

前日の九月九日、高向宮司以下神職三名が大島へ渡島し午後五時より明日の渡航安全祈願祭が齋行された。

一夜明け当日早朝、御座船となる「友栄丸」(船長・上野



沖ノ島

和行氏)にみあれ祭御座船の船飾りと同様の「国家鎮護」の大幟、さらに「御長手」と呼ばれる紅白の吹流しが立てられ、船首には「波切り御幣」がつけられ御神璽お迎えの準備が整えられた。

午前七時、高向宮司以下神職四名、沖・中両宮奉賛会沖西敏明会長以下役員・宗像大社海洋神事奉賛会権田仁八郎

会長、宗像漁協大島支所より山口國一理事、沖中両宮翼賛会の総勢十八名にて大島港を出港、薄曇の天候であったが海上は凧、同八時過ぎには無事沖ノ島へ到着した。

到着後、直ちに海中にて禊をし、沖津宮本殿にて出御祭が齋行された。神職が御神璽を捧持し、御祓いをしながら参道を下り御座船「友栄丸」に奉安し一行は



沖ノ島波止場にて

再び大島中津宮へ向かった。午後零時半、大島港へ入ると多くの島民が沖津宮の神様を波止場までお迎えに集まり、着港すると大島駐在に先導頂き中津宮まで陸上神幸を行い、同一時入御祭が齋行され無事本年度の沖津宮神迎え神事は滞り無く納められた。

来る十月一日秋季大祭みあれ祭は中津宮本殿に仮鎮座された沖津宮御神璽が中津宮の御神璽と共に海上神幸されお迎えされる辺津宮御神璽と年に一度の再会を果され、三宮が一体となり、より強く新たな御神威を発揚されるお祭りである。

氏子会臨時総代総会開催

八月二十八日臨時氏子総代総会が置鮎会長以下評議員・総代一〇二名出席の下、清明殿で開催された。

賛金の配布・収集方法等が説明された。評議員・総代からは、奉賛金の取り扱い等の質問はあったものの、ご理解も頂き承認された。

主たる議題は、先の氏子評議員会にて承認された「平成ノ大造営」取り組みについてであり、議事では置鮎会長が議長に選出され、造営事業を十カ年かけて行うことを説明、次に氏子会での奉



前回の造営事業でも、氏子の皆様より、多くの御奉賛を頂いた。造営事業だけではなく、様々な祭事・行事も氏子の皆様にご協力頂き行われている。今回の造営事業も氏子・崇敬者の皆様と一体となり、無事に御造営の終了を迎えたい。

第二回 氏子会総代総会

九月十八日、本年度第二回目となる氏子会総代総会が置鮎会長以下九十名出席の下、清明殿にて開催された。

には決まらず、後日選出後に大社に連絡を頂く事となった。奉幣使は祭典前日の一日に神社にて齋泊いただいた上で二日祭に御奉仕いただく。

議事では置鮎会長が議長に選出され、秋季大祭を中心とした議案の説明が各担当者よりあり、ほぼ原案通りに承認頂いた。

秋季大祭齋行にあたり、氏子の皆様には、海上神幸に始まり、様々にご協力頂いている。宗像に秋を告げる一連の祭事に、神社も氏子の皆様と

秋季大祭氏子奉幣使においては、旧津屋崎地区の選出で承認を頂いたものの、総会中

をを迎えたい。

平成二十五年度 学芸員実習開催

去る八月十九日から八月二十九日まで、当大社神宝館において学芸員実習が行われた。今年度は県内外の学生計八名が受講した。

実習生は毎朝、当社職員とともに朝拝式に参列して清々しく実習に臨んだ。初日は、当大社の概要、神宝館の意義と活動について学び、考古学(福嶋学芸員・沖ノ島祭祀)、民俗学(石井忠氏・漂着物、



講義にて実際に、刀剣を手入れする実習生

楠本正氏(海人)、歴史学(河窪学芸員・古文書)などの講義や、刀剣手入れ(藤川宣重氏)、学芸員の指導による拓本採りや展示替え作業などの実務を体験した。また、宗像市から行政の文化財保護への取り組みについて指導いただいた。

学生は、当大社をとりまく歴史を見つめながら、文化財保護や文化の啓発・継承に携わる学芸員の責務や本質に迫っていった。最初は仕事が多岐に及ぶことに戸惑っていたが、真面目に誠実に実習を消化する中で、仕事の意義ややりがい



展示替え作業の様子

魅力を見出したようである。カリキュラムを修了した学生の表情には、学芸員になるため、一層の努力をするという決意が見受けられた。



会期中の館内

特別公開展「歌人たちの競演」を終えて

宗像大社所蔵五組の三十六歌仙図扁額を公開

去る七月二十日から八月二十五日まで、当大社神宝館で、桃山時代から江戸時代にかけて奉納された五組の三十六歌仙図扁額が公開された。扁額とは絵が描かれた板額のこと、一枚の板に三十六歌仙の個々の肖像画と代表歌を描いて三十六枚で一組をなすものである。

会期中、各組の扁額は前期、後期にわけて一堂に陳列された。注目すべきは、天正年間(一五七三〜一五九二)に宗像大

宮司氏貞が辺津宮へ奉納したと伝わる最古の扁額。書は聖護院道澄。絵は狩野永徳もしくは永徳の息子の光信と見解がわかれる。狩野派黎明期の数少ない作例の一つとされる重要作品で、前・後期合せて四面公開した。

また、延宝八年(一六八〇)に福岡藩主黒田光之が辺津宮内陣へ奉納した扁額は、書は藤原基時、絵は狩野安信で、全期通して



在原業平 延宝八年 福岡藩主黒田光之の奉納

二十九面公開。光之が貞享三年(一六八六)に辺津宮拝殿へ奉納した扁額も前・後期合せて四面公開。光之の重臣で書・絵・茶道に精通した文化人として知られる立花実山が、書・絵ともに描き、元禄十三年(一七〇〇)に大島中津宮へ奉納した扁額は前・後期合せて八面、安永八年(一七七九)に両浦氏子中が奉納した扁額は前・後期合せて四面公開された。扁額製作には当時の名高い絵師と書家が携り、優美と趣を表現した。荘厳豪華な扁額には奉納者の篤い崇敬や祈りが込められている。当代の信仰のあり様がうかがえる貴重な作品群を周知した今回の公開は大変意義あるものとなった。



ウラジオ艦隊の攻撃 常陸丸

(続)

浜の寄物

282

いしただし



絵馬に描かれた常磐は明治三十二年(一八九九)にイギリスのアームストロング社で建造された。浅間・出雲・磐手の装甲巡洋艦も同社製であった。浅間と常磐は二本煙突。出雲と磐手は三本煙突であった。煙突が二本は、艦もスマートに見える、絵馬の常磐は白い船体のせいか精悍さも感じられる。常磐は浅間と同形艦で、排水量九、一八五t、水線長二四・三五m、幅二四・四八m、一八、二四八馬力、速力二一・二五kt、二十cm砲四門、

十五cm砲十四門を登載、イギリス艦も保持していない重砲装であった。アームストロング社は速射砲のメーカーとしても知られる。日清戦争で活躍した吉野、高千穂、和泉も同社製である。ロシアはロシア太平洋洋艦隊を旅順におき、装甲巡洋艦「ロシア」「グロムボイ」「リュウリック」と他に巡洋艦二隻をウラジオストクに配置したが、これがウラジオ艦隊である。艦隊は明治三十七年



上村艦長

(一九〇四)二月九日から八月一日まで六回攻撃して通商破壊をおこない、五回まで対馬海峡海域で活動している。明治三十七年六月十五日、朝鮮半島にむかう陸軍の輸送船「佐渡丸」「和泉丸」

「常陸丸」をウラジオ艦隊が襲い常陸丸と和泉丸を撃沈、多くの兵員が失われた。撃沈された常陸丸の将兵や遺品が遠賀郡芦屋浜に漂着した。(常陸丸殉難勇士之碑が昭和十八年六月建立、浜崎海岸に建てられている)

ウラジオ艦隊は神出鬼没で、上村彦之丞中将の第二艦隊は、出雲、吾妻、磐手、常磐の装甲巡洋艦で索敵行動を繰り返していたが捕捉できず、国民か

らも批判や批難がおこった。八月十四日ついに朝鮮の南岸、蔚山沖で、ウラジオ艦隊を発見、日本側四艦と「ロシア」は一万二千t級の大型装甲巡洋艦で激しい砲撃戦を展開、リュウリックを撃沈、「ロシア」、「グロムボイ」には多大の損害を与えた。撃沈されたリュウリックは五十発を被弾している。

これら第二艦隊の装甲巡洋艦は日本海戦にも参加多大な戦果をあげている。その後、常磐は大正十一年(一九二二)敷設艦として改装され、太平洋戦争末期には潜水艦の侵入を防ぐために、フィリピン北方や沖縄、対馬海峡などに、機雷を敷設している。装甲巡洋艦は明治、大正、昭和と海防艦や敷設艦、練習艦として生き残ったものが多い。日本軍艦一〇〇選 野沢正、日本軍艦物語 木俣滋郎。



芦屋歴史民俗資料館の常陸丸展

宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日メット



福津市

若木台

山崎 公俊

神苑の鯉に餌をやるふたりゐて子を宿すひとがもつばらはしやぐ
神苑を俯瞰するような視線と描写で、写真のように場面を切り取った
一首。四句は(身籠る人が)とすると字余りがなくなり調べが良くなる。

北九州市

八幡西区

豊田 光子

さかのぼる記憶の中に甦る数じらみ・貧乏葛吾れは兵たり
作者が女性なので、結句の「兵」に戸惑ったが、従軍看護婦や慰問団ならあり得るだろう。手掛かりになる言葉が欲しいが、行軍で藪を歩いた記憶か。

うきは市

浮羽町

向 則正

赤きカンナ咲き続く道ひとり立つ恋とは気づかず君去りしまま
カンナと失恋の取り合わせが効いている。現在のことか過去かが気になるが、思い出なら上の句を「カンナ咲く道に一人で立ちていき」などとしては。

宗像市

土穴

山本 静子

家はそこ雨だ走られぬこの足の歩みくるとぬれて帰り来
家がすぐそこなのに走れず濡れてしまった作者の嘆きがよく分かる。言葉を整理して(走られぬ足で帰れば降り出しし雨にそぼ濡る家は近きに)とした。

宗像市

多禮

早川 祥三

ひさかたの風が迎える盆帰省父母遠くオニユリの墓
初句に工夫があるが、枕詞(ひさかたの)は風に使えるかどうかが疑問。(帰省せし盆のふるさと風つよく父母遠しオニユリの墓地に)としてみた。

福津市

中央

池浦千鶴子

久に来て様かわりせし街並みにさがせど判らぬ買付けの店
意味がよく分かり、共感できる歌。初句の(久に)には久しぶりの意味は無いので注意を。しばらくぶりに訪ねる店なら買付けではなく昔馴染みでは。

宗像市

田久

巻 桔梗

「お茶くらゐ飲んで行かんね」落ちつかぬ其稼ぎの娘を妻は座らす
忙しい日常を送る娘さんを気遣い、寂しさも感じている夫人がこの一首でよくわかる。夫人の言葉が効き、臨場感がある歌。

福津市

星ヶ丘

佐々木和彦

津屋崎の潮風うけて咲くあやめ玄海よりも濃紺なりき
潮風は花の色を濃くするのだろうか、美しい歌。結句は(紺色の濃し)に。

宗像市

池田

森 龍子

昼の熱残る暈を踏みてゆく素足にさぐる秋の気配を
皮膚感覚を大切にされた歌。朝夕の涼しさを恋う作者だろう。切れが二つあるので、三句を(踏みながら)とし、四句切れにしては。

福津市

若木台

野間 精一

甲子園にひびく校歌はうるはしき故郷の山河を文語に歌ふ
高校野球の楽しみの一つは高校のある地方の映像と校歌。たいていの校歌には故郷の美しい自然が詠まれ、文語調。そこに気付いた作者は鋭い。

◆ 選者詠

十月の晴れた土曜日夫ときて波止に陣取るひと日を釣らん
潮風にながくさらされ耳澄めり鷗の愛語ききわけるまで

第五九九回

俳句作品集

宗像市

日の里

石松 弘次

空蟬や大空仰ぎ果てにけり

宗像市

多禮

早川 祥三

形代や風の池心を樽葉守

宗像市

武丸

白土 凌一

鈴虫の泣きたる今夜秋近し

宗像市

日の里

花田いつ枝

日昇る呼応せしごと蟬猛る

10月祭事暦

- 1~3日 秋季大祭
- 15日 月次祭
午前10時~ 高宮祭、第二宮・第三宮祭
午前11時~ 総社祭、豊栄舞奉奏
- 17日 表千家献茶祭
午前11時~
- [大島・中津宮]
19日 沖・中両宮秋季大祭
午前9時~ 沖津宮大祭
午前11時~ 中津宮大祭

編集後記

八月下旬、沖ノ島で十日間奉仕してまいりました。同時期に国内を襲った、竜巻、大型台風、大雨。沖ノ島も台風の影響により、社務所は吹き飛ばされるかのごとく、轟々と風を受け、どうすることも出来ない、自然の脅威を身を以て体感しました▼近年異常なまでに猛威を奮う自然、これは間違いない現代の豊かな人間社会が積み上げた結果であろう。元来、神社は海・川・山・石等に神を見、地震・台風・大雨・日照りなど自然災害の鎮めの祈りから生まれてきたものである。抗いようのない自然災害に「畏怖」し、豊かな恵みには「感謝」を捧げてきたのである▼全国各地では美りの秋、この時期、収穫に感謝する祭りが行われ、当大社でも五穀豊穣、大漁を祈り感謝する秋季大祭(田島放生会)が十月一〜三日の間行われる▼収穫、実りにあふれる秋、豊かな恵への「感謝」だけではなく「畏怖」の念も改めて思い起して頂きたい。(鈴)

発行所
宗像大社社務所・宗像会

住所 千八一一三五〇五
福岡県宗像市田島二三三

電話 (0940)六二一一三二(代)

発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延・鈴木祥裕

制作・印刷 セネラルアサヒ

毎月1日発行
定価1年送料共 1,000円